

まんじゅうこわい

さあ、これからだれにでもきらいんものや、こわいものがあるというおはなしをいたしましょう。
あるとき、町内のわかものたちが何人かあつまりました。

そこで、自分がこわいとおもうものを言いあうことになりました。

「おれは、なんといってもやつぱりへびだな。ひもみたいなのに、によるによるうごくんだ。ああ、こわい、こわい」

「いや、何といつてもくもですよ、いとをひいて、つーつとさがってきて、くびすじでもぞもぞされたら、ひゃあ、こわいっ。めをまわしてしまいますね。」

「いやいや、けむしではないですか。あんなにちいさくてけむくじやら、みるだけで、ぞくぞくするよ。」

「おれは、たぬきだ。なんでもおぼけになってでてくるそうじゃないか。まだおぼけにはあつてないけど、おぼけはごめんだねえ」

すると、いままでだまっていたまっちゃんがおおわらい。

「あつはつはつはつ、こわい、こわいだなんて、びっくりだなあ」

「えっ、まっちゃんはへびやおぼけがこわくないのかい。」

「ああ、うんと長いへびをみつけたらちまきにして、たぬきがばけてでてきたら、せんたくやそうじをさせてやるよ。」

「じゃあ、くもはどうだい。」

「くもだつてさ、いっぱいつかまえて、糸を出させてなつとうにまぜれば、ねばりが出るだろう。」

「けむしはこわいよねえ」

「ぜんぜんこわくないねえ。けむしは、ぼうにむすびつけて、はぶらした。」

「それなら、まっちゃんはこわいものなどないというのかい？」

「みんなにきかれたまっちゃんは、きゅうにもじもじ。」

「いや、あもう、そのう、じつはひとつだけあるんだ。」

「そうかい。そらあなんだい。」

「いいかい、いちどしかいわないよ」

「まるくてあまくて。」

「まるくてあまくて・・・」

「まさか・・・あれかい」

「そう、まんじゅうさ。おれはまんじゅうがこわいんだ。」

「ええっ、まんじゅうがこわいだつて」

「ああ、まんじゅうのことをおもいだしたらふるえてきたよ。こわい、こわい」

まっちゃんは、隣の部屋に行くどふとんをかぶつて、ぶるぶるふるえています。

「さっきまであんなにいばつていたのになあ。」

「ああ、へびやくもやけむしがこわいといつたらわらったんだからなあ。」

「どうだい、ちよつとおどかしてやるかい。」

みんなはまんじゅうをどつきりかつてくると、松ちゃんのまくらもとにそつとおきました。

「目のまえのやまのようなまんじゅうをみたら、まっちゃんどうするかな。」

「きつとこしをぬかすかもしれないぞ」

「おーまっちゃん、おきてこいよ。」

「わかつたよ、でもあれのことは言いつこなしだぞ。」

「わかつた、まんじゅうのことはいわないから」

すると

「うわーっ、まんじゅう」とひめいがありました。

となりのへやではみんな大わらい。

ところが、しばらくして、へやをのぞくと、なんと、松ちゃんがまんじゅうをたべているではありませんか。

「むふふふふ、まんじゅうはうまい、いやいやこわい、こわい」

みんなはびつくり。

「まっちゃんは、まんじゅうがすきだったんだ。」

だまされたと知ったみんなはまちゃんに聞きました。

「やい、まっちゃん、本当にこわいものはいったいなんだ」

ときくと、まっちゃんは

「そうだなあ、今はうまいお茶がこわい。」

みなさん、せみの赤ちゃんはどこにいるか知っていますか？

せみのあかちゃんはその中にいるんですよ。

土の中で土のお布団を着て、雨のごちそうや木の根っこのおちちをのんでいるのです。そして、六年も七年もかかって赤ちゃんはせみになるのです。

せみの子どもは土のおじさんにおれいをいいました。

「長い間、家をかしてかしてくださってありがとうございます。僕はこんなに大きくなってこんやは家を出るのです。」

「そうか、もう六年もたったのかね。気をつけていきなさいよ。」

土のおじさんはやさしく言いました。

せみの子どもは、のそりのそり、ほそながい土のあなをとおって上がっていきました。

夜です。森が見えました。

森のむこうに、お月様が出てきました。

「お月様どうかみていてくださいな。ぼく着物をぬいで上手に大人になるんですよ。

せみの子どもは、

「どっこいしょ」と

あなから外にはい出して木の上のぼっていきました。

あつ、すごい。

せみの子どもの茶色のかたい着物がせなかのところで二つにわれました。頭も胸も、薄いきれいな色です。足が出るとせみはくるっとさかさになって、上手に茶色い着物をぬぎました。

体もぐんぐんのびて黒い色にかわりました。

せみは大人のせみになったのです。

「おう、せみくんよくやったえらいねえ」

森が明るくなりました。

あさです。

せみは新しいじょうぶな羽を広げて力いっぱい立ちました。

みーん、みーん、みーん、せみはうれしくてたまりません。

せみは大きな声で歌いながら、まっすぐになかまの声のする森のほうへ飛んでいきました。

「あつ。」

かわいそうに、せみはくものすにかかってしまいました。

「ああ、手も羽もうごかない。こまったな。こまったな」

いくらかがいてもせみはとぶことができないのです。

そこへのそり、のそり、くもがやってきました。

「ははは、うまそうなあさめしだ。せみくん、さあ、たべてやるぞ」

「いやだよ。いやだよ。くもさんたすけておくれ。」

「あははは、だめだめ」

「くもさん、ぼくは長いあいだ土の中にいてやっとそとにでたんです。まだ、ちようちよや花ともおともだちなっていないんです。」

おねがいですからたけてください。どうかたすけてください。」

「だめだめ」

くもはとびかろうとしました。

この時、一人の子どもがはしつてきました。

「あつ、せみさん、今、たすけてあげるよ。」

子どもはあしもとからぼうをひろって

「こらっ、いじわるくもめ、おとなしいせみさんをいじめたりするとしようちしないぞ。」

くものすをはらいのけて、せみをたすけてくれました。

「しんせつなぼっちゃん、ありがとう、ありがとう。」

「さよならーせみさん、さよならー」

森には花がさいてちようちよがとんでいました。

なかまのせみもみんな楽しそうにないていました。

みーん、みーん、みーん。